

2015年8月2日開催
第8回ベーシックセミナーでのアンケートへの回答

本年8月の第8回ベーシックセミナーも、おかげさまで参加人数も多く、今回も総じて評価が高く、アンケート調査でも好評を得ることができ、これも皆さまの積極的なご参加とご協力のおかげと感謝しております。ただし、毎回ごくわずかですが厳しいご意見も当然承っており、これらにつきましては、少数意見ということでないがしろにするのではなく、これらの意見こそ重要と考え、今まで通り真摯に対処していく所存です。

アンケートの中には、本学会の主旨とは異なるご意見のために本学会からの回答として対応できないものもございます。そのためすべてにお答えしているわけではないことをまずはお承知おきください。しかし、このアンケートにお答えいただくことは、今後の学会運営やシンポジウム、セミナーの開催にとっても重要なものでありますので、より多くの方から闊達なご意見を今後も頂戴したいと思っております。

これらのアンケート結果への回答は、毎回学会開催後1～2か月以内に増田会長をはじめとする学会運営委員にて会合を開き作成しております。アンケートへの回答は要点のみ学会開催時に発表させていただき、その他はHP上に更新しております。

アンケートへの回答は、ご意見ご批判に対してのみ返答しておりますが、一方ではご評価いただいたものや好意的なご意見はかなり多くいただいております。この場を借りて御礼申し上げます。

加えて、すでに周知されていることと理解しておりますが、本学会の方針や主旨、過去の講演で解説している内容などに対するご意見、ご質問への回答は、毎回同じような内容になってしまうため、ある程度まとめさせていただき、これらもHP上に更新したいと考えております。したがって、学会参加前に本学会の方針や主旨をご理解いただくと共に過去のアンケート回答やシラバス、ホームページ掲載の「シンポジウム・ベーシックセミナーについて」、「臨床免疫検討会とは」、「技能講習 Q&A」などをできるだけご一読ください。

<アンケート結果の紹介>

○興味深かった講演

アレルギーとサイトカイン 2015 年改訂版	25
犬猫の脊髄再生医療	25
犬アレルギー検査の臨床応用① 2015 年改訂版	22
第 7 回臨床免疫検討会	12
脊髄の再生医療	11
アレルギー HDM の効果の長期維持を目指して	8

<技能講習および技能講習制度について>

○迅速なアップデートがされるので勉強になります。

○スペシャリストを育てたいのでしょうか。難易度が高いため、このままのレベルであると、受験者が減るのではないのでしょうか。難易度に合わせて、I 種 II 種と分けるのはどうでしょうか。

技能講習制度は、これを履修した獣医師が論理性と整合性のある系統だったアレルギー性疾患の診療を行う技術を習得することが目標であり、さらにその知識と診療技術を獣医業界全体に、そして次世代に伝達することを目指しております。レベルに合わせて I 種、II 種と分けをする考え方は、受講者や受講者確保の点からは非常に効果的であると思いますが、一方では飼い主様や外部の方に対する配慮ではなく、あくまで獣医師視点の事情であり、その分け制度自体に意義が認めたいことが問題です。当分の間は現行とし、今後の課題とさせていただきます。

講義の内容も含め、なお一層の努力が必要と思います。

○それぞれの免疫事象について、ヒトまたはマウスやラット、犬や猫など、どの動物種に対してのものなのか、明確に示してほしい。

今までもその点につきましては、資料や講演内容でも重要な点として扱っておりました。しかし、不十分であったというご指摘と受け止め、今後一層そのように留意いたします。実際には、犬猫の免疫で解明されている部分は非常に少ないため、ほとんどが実験動物やヒトの研究データの外挿になっております。

○システムが分かりにくいです。

配布させていただいております資料や HP をご参照いただくか、学会事務局までお問い合わせください。

<臨床免疫検討会について>

○今回は、先生方にもご参加いただくという趣旨から、内容についての賛否を問わせていただき、合わせてそのお答えに対するご意見をいただきました。

賛成意見 9 票

- ・現状では、採用しない。問題点の改善や一定の条件を満たすことができれば、十分行うに値する。
- ・効果は未確定であるが、補助的な治療法としてひとつの選択肢となるのではないか。
- ・飼い主さんの希望に応えるため、また満足感を考えると行う。
- ・QOLの改善は実証されているので、その点だけに利点を見出すのも良いのではないか。

反対意見 14 票

- ・動物では、細胞移入療法について、免疫学的な論拠がないばかりでなく、科学的根拠や理論、方法、効果、安全性、設備、技術、インフォームドコンセント、エビデンスなどすべてが未熟であり、問題が山積している。この大前提が解決していない限り、採用するべきではない（意見多数）。
- ・上記のような中で行う獣医療は、正しい医療と言えるのか。
- ・飼い主さんの希望というが、それはその気持ちにつけこんだビジネスになっていないのか。獣医師が正しく熟慮したうえで、十分な説明責任を果たして行えているのか。また、飼い主さんの希望だけを叶えていけば、獣医師の職責が全うされていると思うのか。これらの倫理観の欠如や監視する機構のない現状の獣医療では、あまりにも危険なことではないだろうか。
- ・投入細胞のポピュレーションの問題や動向が不明であることは、非常に危険である。効果があるかないか以上に少しでも危険性があることについて、どのように考えているのか。正しい告知はされているのか。
- ・そもそも確定診断やそこに至る治療法が正しいのか、ここから検討をせずに、さらに正体の分かっていない治療法を組み込んでしまえば、正しい評価はできない。

<今後取り上げてほしい内容>

○免疫抑制剤について

教育講演の開催を考えております。

○自己免疫性疾患について

教育講演の開催を考えております。が、IMHA 以外の自己免疫疾患につきましては、IBD と同様、その病態や意義からやはり検討しなければいけないでしょう。

○臨床分野のお話が聞きたい。

○猫の免疫について。

○今回に限らず、本会では測定系も含めた、実験・研究の戦術機序などにも触れられているので、病態のイメージが明らかになりやすい。ついては、その他分子生物学的手法についてもさらに盛り込んで進めていただけるとありがたい。

○ヒトや犬におけるメラノーマの免疫。

○半導体レーザーと免疫活性。